

播磨国総社三ツ山大祭記念行事

御 神 能

平成二十五年四月二日 午後六時始曲

市民会館大ホール

入場無料

仕 舞

大江山 山田義高

羽衣 岡田すみ子

鶴 上田貴弘

能 楽

田中章文

大鼓 守屋由訓

半 部

江崎金治郎

小鼓 曾和尚靖 笛 赤井啓三

間 前川吉也

梅谷 宏 吉井元晴

後見 笠田昭雄

地謡 久保信一郎 上田宅司

下川宣長

上田大介 上田貴弘

藤谷音弥 勝部延和

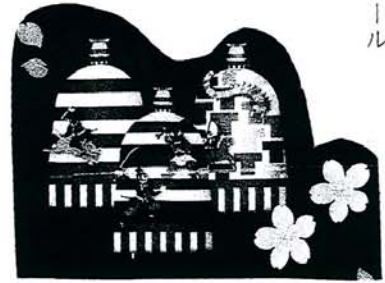
能 半部(はじとむの魅力)

「源氏物語」夕顔の巻から取材した物語。夕顔の花が仲立ちとなって光源氏との恋が始まるのですが、作者は夕顔の花のイメージを女性に重ねて描いています。

絵におきかえれば夏も終わりの夕暮れに、涼やかな水霧の向こうにほんのりと透けて見える、白い花の精を思わせる美しさとはかなさをそなえた女性の姿が浮かび上がってきます。夕顔という花のもつ情趣を大切に、夕顔の花と同じくはかない命を暗示しながらも、出会いのときめいた部分を可憐に描いている美しいお能です。「源氏物語」の「夕顔の上」にはるか時空をこえて出会うことが出来るお能でもあります。

ります。

(物語は裏面に)



物語

都雲林院に住む僧がひと夏の修行を終え、夏の間毎日花を供え続けた、その花をとむらうための立花供養をとり行った。

夕暮れ時に一輪だけ白く微笑んでいる様に際立って美しい花を手向ける不思議な女が現れる。僧に問われるまま女は、その花は夕顔であり、自分は五条あたりに住んでいると言って花の陰に姿を消す。

僧が五条あたりを訪れてみると、昔どおり半部に夕顔が咲く家があり、内から女の声が聞こえる。菩提を弔おうと言う僧の前に、半部を押し開けて姿を現した女は、在りし日の光源氏との恋物語を語り舞を舞う。

やがて東の空が白み始める頃、回向を願って女は再び半部の内に姿を消す。それはすべて、僧の見た夢でありました。

半部屋

